

神からの逃亡

[聖書] ヨナ書 1:1～2:1

主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすり寝込んでいた。船長はヨナのところにきて言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」さて人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」

乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したとって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

[序] ヨナに示された神の言葉

今日から3回は、預言者ヨナの活動を学びます。3頁半の短い預言書です。すぐ読み終わることが出来ます。3回に分けなくても、1回の説教で語れます。さあその第一回目、何に焦点を絞ってメッセージにするか、大変苦慮いたしました。やっと今朝になって、自分なりにまとまりました。原稿の仕上げが間に合いませんでしたので、後日印刷してお配りします。

ヨナは北王国の中興の祖と言われたヤロブアムⅡ世(BC790～749)の時代に北王国で預言活動をしたと言われています。北王国の北隣の国シリアは、ヤロブアムが死んで17年後のBC732年にアッシリアに滅ぼされました。そして北王国もまたそれから11年後のBC721年にアッシリアに滅ぼされました。ですからヨナの時代は、北からのアッシリアの圧迫が次第に強くなりつつあった時代です。

私たちは7月から、イザヤとエレミヤの預言を読んで参りました。イザヤ書は66章、エレミヤ書は52章の預言書です。イザヤもエレミヤも神さまから数々の言葉を語るように示され、それを全身全霊こめて忠実に

取り次いだのでした。ところがヨナが神さまから語れと命じられた言葉は、「二ネベの悪はわたしの前に届いている」「あと40日すれば、二ネベの都は滅びる」。たったそれだけなのです。あとはヨナの祈りとヨナと神さまとの問答だけです。さあ、3回にわたって何を語ったらよいのでしょうか。

今朝のテーマは、神さまから逃亡しても逃げ切れなかったヨナと神さまとの、切っても切れない絆です。

[1] 神さまから逃げ出したヨナ

神さまの言葉がヨナに臨みました。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている」。するとヨナは神さまと縁を切って逃げ出したのです。港へ行き、タルシシュ行の船に乗り込みました。パレスチナは地中海の東、タルシシュは地中海をはさんで西、今のスペイン領です。地中海を囲む地域一帯が当時の世界だと思われていましたから、世界の西の果てに逃亡しようとしたのでしよう。

ところが海が大荒れとなり、船は難破の危機にさらされました。船乗りたちにとって地中海はいわば自分の家の庭のようなものです。彼らは積荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとしていました。しかし嵐の強さは異常です。船が今にも砕けんばかりになりました。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげました。そしてこの様な天罰をもたらす犯人がこの船に乗っているに違いないと、くじ引きで犯人探しをしました。

くじはヨナに当たりました。「一体お前はどんな悪事をしでかして、神さまを怒らせたのか」。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ」。海と陸を創造され、支配しておられる神さまを信じ畏れる者だなどと、よく言えたものです。その神さまに反抗して逃げ出したのですから。それにしても神さまは海を支配しておられるのに船に乗って逃げるとは誤算でした。神さまが風を起こせば、たちまち船は難破してしまうのです。

神さまと縁を切って逃げ出したと白状したヨナは、船乗りたちに申し出ました。「私を海に放り込んで下さい。そうすれば海は穏やかになります」。船乗りたちは矢張り海の男です。「そうか、それならそうしよう」とは言わず、なお懸命に船を操りました。しかし万策尽きて、遂にヨナに言われるまま、彼を海に放り込みました。たちどころに海は静まりました。船乗りたちはヨナの語った海と陸を創造してご支配しておられる主なる神さまへの畏れを抱き、信じて拝む誓いを立てました。ヨナは死に際して、捨てたはずの信仰の証をしたのでした。皮肉ですね。

神さまは巨大な魚に命じてヨナを呑み込ませ、三日三晩魚の腹の中の闇に留め置かれました。反省の時を与えられたのです。

どうしてヨナは神さまから逃げ出そうとしたのでしょうか。考えられる理由が三つあります。第一は、先にエレミヤで学びましたように、神の裁きが下るといふ滅びの預言をすることは、人々の反発を買い、嫌われる役目だからです。エレミヤは結婚出来ませんでした。友だちとお酒を飲んで楽しむ機会も持てませんでした。孤独な生涯を余儀なくされたのです。そして幾度も投獄されました。ヨナも人々が聞きたくない裁きと滅びの預言をする役割の厳しさを、充分承知していたのでしよう。そしてそんな役目を命じる神さまなど、御免こ

うむりたいと思ったのでしょうか。

第二の理由は、ヨナがやがてはアッシリアに滅ぼされる弱小国の人間だからです。世界に領土を広げている帝国の都ニネベで、ユダヤ人のヨナが「この都に神の裁きが下り滅びる。悔い改めて悪の道から離れよ」などと叫んだら、世界の大国意識を持つアッシリア人たちから、俺たちを侮辱するのかと、殺されてしまうでしょう。ユダヤ人の自分にやらせる仕事ではありませんと、彼は言いたかったのでしょうか。

第三の理由は、アッシリアの都ニネベに神の裁きが下れば、アッシリアの圧迫が弱まり、北王国にとっては願ってもない好都合です。悔い改めないように放っておくべきです。万に一つ、自分の警告でニネベの人々が悔い改めたら、憐れみ深い神さまのことですから、裁きを取り止めるでしょう。それでは敵に塩を送ることになります。そんな役割など真っ平御免。逃げ出して身を隠した方が、国のためになろうというものです。

こうしてヨナは、神さまの許から、地の果てへの逃亡を企てたのでした。しかし神さまの愛は普遍です。アッシリアがどのような国であろうとも、イスラエルの民と同様に、悔い改めて悪の道から離れることを、神さまは強く願って、ヨナを選び、お用いになろうとしたのでした。

[2] 救いは主にこそある

それにしてもヨナという人は不思議な人物です。嵐で海が大荒れとなり船が今にも砕けんばかりになりました。この海で生きてきた船乗りたちでさえも恐怖に陥って、それぞれ自分の神の名を叫んでご加護を求めたりして、右往左往しているのに5節をご覧ください、船底にかくれて横になっていたヨナ独りが、ぐっすり寝込んでいるのです。船長があきれて、「寝ているとは何事だ。せめて起きて自分の神に祈ることぐらいは出来るだろう」と叱っています。どうして彼は、ぐっすり寝て居られたのでしょうか。

ここで同じようなことが、イエスさまにもあったことを、私たちは思い起こします。ガリラヤ湖を船で向う岸に渡ろうとされた時のことです。突風が吹き始め、次第に激しくなりました。ガリラヤ湖で漁師をしていた弟子たちのことです。懸命に舟を操りました。しかしどうしても荒波を乗り切ることができません。イエスさまは艫の方で眠って居られました。弟子たちはイエスさまを起こしました。「主よ、助けてください。おぼれそうです」。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」。風と波をお叱りになり、嵐を鎮めてしまわれました(マタイ8:23~27)。

「信仰の薄い者たちよ」。イエスさまは、海も陸も創造してご支配しておられる主なる神さまを父として、全幅の信頼を寄せておられたのです。丁度今日も両親と礼拝に出席している小嶋夫妻の赤ちゃん、恵利華ちゃんがお母さんのふところに抱かれているならば、どのような嵐の中でも平安に眠れるのと同じです。としますとヨナにも同じ様な信仰があったからだということが言えてきます。

ヨナは神さまを捨てた、神さまから逃げ出したと思っているのですけれども、彼自身の心と体は、神さまのふところの中にある平安を、依然として持ち続けていたと言えるのではないのでしょうか。ですから船乗りたちが皆恐怖に陥ってあたふたしている嵐のなかでも、ぐっすり寝込んでいたのです。

2章に進みます。ヨナは神さまが送られた巨大な魚の体内の暗黒で、三日三晩を過しました。神さまから

与えられた反省の時間です。その時彼の口からは、祈りが出て来たのです。3節。「苦難の中でわたしが叫ぶと、主は答えてくださった。陰府の底から助けを求めると、わたしの声を聞いてくださった」。

この聖書の巻末にある「用語解説」には、陰府とは「死者が集められる場所で、地下にあると思われていた」とあります。ヨナは死を体験したのです。死者が集められる陰府のどん底に横たわった自分を自覚したのです。ところが彼はその陰府のどん底で、神さまに助けを求めて祈り叫んでいるのです。そして自分の祈りを神さまは聞いて、答えてくださったと言っています。

「あなたはわたしを深い海に投げ込まれた」。違います。ヨナが言い出して、船乗りたちが投げ込んだのです。しかし神さまによって投げ込まれたと、彼は受け取っています。「わたしは思った。あなたの御前から追放されたのだと」。違います。彼が神を捨てた、彼が神を自分から追放したのです。しかし自分が主語になって行動した積りでしたが、主語は神さまだったということがわかったのです。人生、主語は神さま。神さまの御手の中で、私が思い、考え、行動していることがはっきりしたのです。

神さま、あなたは私を深い海に投げ込み、御前から追放されたはずなのに、息絶えようとする時に私がお祈りしますと、あなたは命を滅びの穴から引き上げてくださいました。「救いは主にこそある」(2:10)。これは三日間の臨死体験で得たヨナの結論です。すると神さまは魚に命じて、ヨナを陸地にお戻しになったのです。

[結] 切っても切れない絆

ヨナ書を読んでいますと、ヨナと神さまとの絆の太さを強く覚えます。神さまから逃亡しようとしたヨナを、神さまは決してお見捨てにはなりません。彼が断ち切ったつもりでも、彼は神さまとの絆にしっかり結ばれていたのです。神さまを捨てながら、嵐の中でぐっすり寝込んでいるヨナ。だからこそ、陰府のどん底で祈りの叫びを上げているのですね。

私たちが時としてヨナになります。礼拝に出ない。教会の活動から身を引いてしまう。聖書を読まなくなる。祈らなくなる。神さまから遠ざかろうとします。でも、呼吸がまさに止まろうとする時には、「私の主よ、助けてください」との祈りが口から出てくるのではないのでしょうか。

ヨナを放さなかった神さま。神さまから逃げ出しても、神さまを否定して暗黒に陥っても、神さまは、私の身近に居て下さる。否、神さまの御手の中で私たちは生きているのです。何と有難いことでしょう。この信仰を大切に生きて参りましょう。

また子どもたちに、小さい時から、神さまとの絆をしっかり結んで生きていくように、育てて参りましょう。大きくなってしまった息子・娘たちにも、神さまとの絆の大切さを証して参りましょう。